

★勘定科目決算書 (新決算書)

この新しい決算書式の発見は

新しい価値を提供する。

Up Down 方式経営分析の副産物

複式簿記から生まれている決算書は文字通り「別の裏側の顔」がある。勘定科目ごとの科目別集計表は従来の決算書と同じくらいの重要性を持っている。なぜ我々はそこに気づかなかったのだろうか？

従来決算期末の勘定科目の残高を「勘定科目明細表」としてその主なものを表示することが習慣的に行われてきた。

そうではなく勘定科目そのものの動きを相手勘定の集計により「勘定科目決算書」としてワンペーパーとしてまとめたものが有っても良いのではないかという問いかけである。

いままでそれが無かったのは、それは計算の二重手間、手時間のかかる仕事であったからに過ぎない。今やコンピューターや AI の発達によりこの勘定科目決算書は簡単に作ることが出来る。そして、とてつもない経営に役立つ財務諸表となるだろう。

現在この世にない「勘定科目決算書」について始めて発言し、提案しよう。

「勘定科目」ごとに一枚のペーパーを作り綴じれば良い。勘定科目が 50 個あれば 50 頁の決算書となる。

勘定科目決算書における「キャッシュ」勘定を例にとろう。

キャッシュの増加は様々な取引から生まれる。それを年間で（月間で）勘定科目ごとに集計するだけだ。ここが今までしてこなかった点だ。

勘定科目決算書は T 字形で表現されているとしよう。すると勘定科目（キャッシュ）決算書の増加は右側（貸方）にキャッシュ増加の原因が列挙されることになる。一方左側（借方）にはキャッシュ減少の原因が列挙されることになるだろう。

キャッシュフロー計算書の類ではない。経営の急所を突く。さらに「勘定科目決算書」では、伝票の枚数まで合計額で表示すれば完璧だ。伝票は一枚一枚が取引つまり経営に於ける行動や労働量を示すとも言える。無駄な動きまで指摘できるかもしれない。

この勘定科目決算書により今まで決算書では「経営の半分しか見ていなかった」ことに気づくだろう。その露出性は恐ろしい発見とも言える。

もしこの公表を義務付けられたら、経営の決算の内実をさらけ出されることになる。

しかし一方では、どんな証明付きの決算書より、信憑性が増すであろう。さらに経営の弱点がさらけ出されるだろう。

有形固定資産勘定を例にとると、その購入の原資までわかってしまう。それは自社の経営についての判断材料にもなる。

この勘定科目決算書は会計ソフト会社の決断次第なのである。いずれ「経営者」「株主」「金融機関」などの眼に触れるものとなるだろう。